

Title

受け取ることの存在論－マルセル・モース『贈与論』の本質

Name

中島岳志

一般的に、利他とは誰かに何かを「与えること」だと思われている。自己利益のために行動するのではなく、他者のために行為することが、利他だと考えられている。

しかし、「与えること」が、そのまま利他となるかどうかは、与え手にはわからない。与えられた相手にとって、その物や行為が迷惑である場合、利他は成立しない。むしろ、与え手の一方的な空回りは、利己的な行為として忌避されるだろう。利他は「与えること」よりも「受け取ること」によって起動する。与え手よりも受け手によって規定されるというのが、利他の特質である。

利他を考察するにあたって、マルセル・モース『贈与論』（1925年）は最も重要な古典の一つと言ってよいだろう。よく知られるように、モースは贈与を成立させる3つの義務として（1）与える義務、（2）受け取る義務、（3）返す義務をあげている。

例えば、マオリ社会では、物に宿る精霊の存在が、贈与を起動させていると言う。「ハウ」といわれる精霊は、特定の人や集団に留まりつづけることを望まない。もし、物を所有し続けようとする人がいれば、その人に災いをもたらす。物は贈与されることを欲する。

そのため、物を受け取ると、誰かに返さなければならない。贈与の連鎖を止めてしまうと、「ハウ」が暴れ、不幸が舞い込む。「ハウ」は「与える義務」「返す義務」が生成し続けることを促す。この連鎖によって富が循環し、人と人との関係性が強化される。贈与の循環は、単なる経済行為ではなく、相互補完的な協力関係を構築する社会的行為である。モースはこれを「全体的給付の体系」と呼んだ。

『贈与論』について、これまで注目されてきたのは「与えること」と「返すこと」だった。特に「返すこと」によってこそ贈与の連鎖が生まれ、安定的秩序が構成されていく過程が重視されてきた。

一方、「受け取ること」については、ネガティブな面が強調されてきた。贈与の受け手は、与え手に対して「負い目」や「負債」を抱くことになる。もし、受け取るばかりで、返すことができないでいると、与え手が優位な地位を築き、両者の間に支配／被支配の関係が生まれる。モースは『贈与論』に先駆けて書いた論文「ギフト、ギフト」の中で、ゲルマン語系の言語の「ギフト」という単語には「贈り物」という意味と「毒」という意味があることを強調している。

贈り物を受け取ると、与え手との間に縛りが生まれる。この縛りは、倫理的なものであると同時に宗教的なものであり、呪術的なものである。もし、受け取るばかりで、お返しをしないでいると、「給付の与え手はもう一方に対して優位に立つことになる」（43頁）。贈り物に含まれた「毒」が呪力を持ち、受け手を支配していく。「受け取

ること」には、常に権力的な圧力が含まれており、歓喜以上に脅威の念を喚起するのだ。

こうしてみると「受け取ること」には、多大なる困難が含まれており、回避することが合理的であるようにも思えてくる。しかし、重要なことは、モースが「全体的給付の体系」と呼んだ贈与システムにおいて、主体が人間に限定されないという点である。

モースは、『贈与論』第3章で、インドの古典『マハーバーラタ』を取り上げ、この叙事詩を「ある巨大なポトラッチにまつわるお話にほかならない」と述べている(349頁)。『マハーバーラタ』においては、「土地にせよ食糧にせよ、人が贈り物として与える物はすべて人格化されている」。土地や食料は対話を交わす存在であり、契約の当事者である。

大地は、次のように歌う。

わたしを受け取ってください（受取手よ）、
 わたしを与えてください（与え手よ）、
 わたしを与えれば、わたしを改めて得ることになるでしょう。(355頁)

大地は、まず私たちに対して「受け取ってください」と歌っている。私たちは、大地の恵みなしには生きていくことができない。その恵みを、大地は人間に差し出し、受け取るように促している。

私たちが生きるということは、「受け取ること」に他ならない。太陽や大地からの一方的贈与を受け取ることで、はじめて生の営みが成り立つ。私たちは自分たちの意思を超えて、受け取っている。受け取らなければ、生きることができない。

この根源的な「受け取り」に気づくことによって、私たちは生の本質を知り、次に「与え手」になることができる。大地で育った食物を独占することなく、他者に分け与えること。この「与える義務」は、大地からの「受け取ってください」という歌声を聴くことで起動する。大地のささやきに耳を澄ますことによって、贈与の循環が生成する。

利他とは、自己の存在が「受け取ること」によって成立しているという認識から始まる。自己の能力を過信し、「何かをしてあげること」によって利他を起動させようとするよりも、まずは自己が大地からの受け取りによって「生」を得ていることに謙虚になる。『贈与論』の核心部分には、「受け取ること」の存在論が潜んでいる。

マルセル・モース『贈与論 他二編』（岩波文庫、2014年）